

横芝町文化財研究紀要

II

粉豆遺跡学術調査中間報告

—横芝町南部における低地遺跡の研究—

1986.4

横芝町教育委員会

序 文

横芝町は、姥山・牛熊・鴻ノ巣など貝塚遺跡の多いことで、九十九里地方屈指であるばかりでなく、殿塚・姫塚から出土した埴輪列など、全国的に広く知られている。一方、平野内においても栗山川沿岸の砂丘上に、数多くの土師器の散布地が確認されている。

ところが、隣接する成田空港が開港して以来、地域の開発が急速に進み、存在が脅かされつつある遺跡も少なくなく、埋蔵文化財の保護と地域開発との計画的調和を図ることが重要な行政課題となっている。

今回、発掘調査された粉豆遺跡も同様、時代の進展とともに開発の渦中におかれ、平野内における低地遺跡の規模と性格を把握するための学術調査を行なうことになった。

調査にあたっては、県教育庁文化課の適切なご指導のもとに、調査主任を担当された九十九里総合文化研究所の伊藤一男氏以下、海保惣吉・海保いく子・伊藤清子など調査補助員諸氏の献身的な努力によって、定められた期間内に調査が終了し、ここに貴重な成果を収めることができ誠に喜ばしい限りである。

また、本調査にあたっては、地主であられる早川衛・海保ふさ両氏、さらに郷田良一・小高春雄・西山太郎・鈴木典雄・林勝則・穴沢義功の諸氏の全面的なご支援を賜り、恙なく完了したことに対し深甚なる謝意を表し、併せて関係者各位に厚く御礼申し上げる次第である。一方、事務局にあって本事業の実現を補佐された加瀬盛久主事の努力も付記したい。

調査終了後、九十九里総合文化研究所の協力を得て、出土遺物の水洗・接合・実測など資料の整理・分析に努め、ここに調査成果の概報を公刊する運びとなった。このさきやかな骨子が、横芝町における低地遺跡を理解する上で、また広く学術研究の資料として活用いただければ幸いである。

昭和61年4月10日

横芝町教育委員会

教育長 井 上 武

目 次

序 文

1. 学術調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置と景観	3
3. 発掘調査の概要	4
1) 遺跡の概況	4
2) 調査の概要	4
4. 遺構	5
1) 調査区	5
2) 土層構成	6
3) 遺構	7
5. 遺物	8
1) 土師器	8
2) 須恵器	9
3) 陶器	9
4) 鋳冶遺物	9
6. 埋没腐植土層の土壤分析	10
1) 土壤資料の抽出	10
2) 各種の分析	10
3) 分析結果の整理	11
7. 考察	13

掲図目次

図1・粉豆遺跡の位置	1
図2・遺跡付近地形図	3
図3・遺跡実測図	5
図4・土層堆積状況	6
図5・遺物出土状況セクション	7
図6・遺物出土状況実測図	7
図7・遺物実測図	8
図8・土壤分析サンプル採取位置	10
図9・土壤分析数値表	11
図10・栗山川下流域の低地遺跡	14
参考1・旧地形と遺跡地	2
参考2・地形区分図	12

図版目次

PL 1・栗山川下流域の低地遺跡	17
PL 2・遺跡遠望・遺跡全景	19
PL 3・トレンチ全景	21
PL 4・遺構・遺物出土状況	23
PL 5・土師器・須恵器	25
PL 6・陶器・鉄滓	27

1. 学術調査に至る経緯

昭和50年代以降、横芝町の北部台地では、開発事業による遺跡の緊急発掘が相つぎ、町の文化財行政は急速な展開をみせた。この間、筆者の念頭にあったものは、平野内における低地遺跡の問題であった。

いわゆる埋蔵文化財の保護は、現状では台地上の遺跡に限定され、低地遺跡については全く対象外に置かれてきた。すでに土地改良等によって滅失した遺跡も數多く、現存する遺跡についても、所在地・規模・時期・性格など殆んど把握されていない。

昭和60年7月下旬、横芝町教育委員会では『埋蔵文化財分布地図』作成の一環として、町内における低地遺跡の所在調査を実施した。その結果、粉豆・宮島・伊古田・竜ヶ塚など約15遺跡が確認された。これらの低地遺跡は、砂堆（浜堤・砂丘）や河岸段丘など、平野内の微高地上に占地する土師器の散布地である。遺物の編年をみると、五領期から国分期に至るまで広汎にわたり、

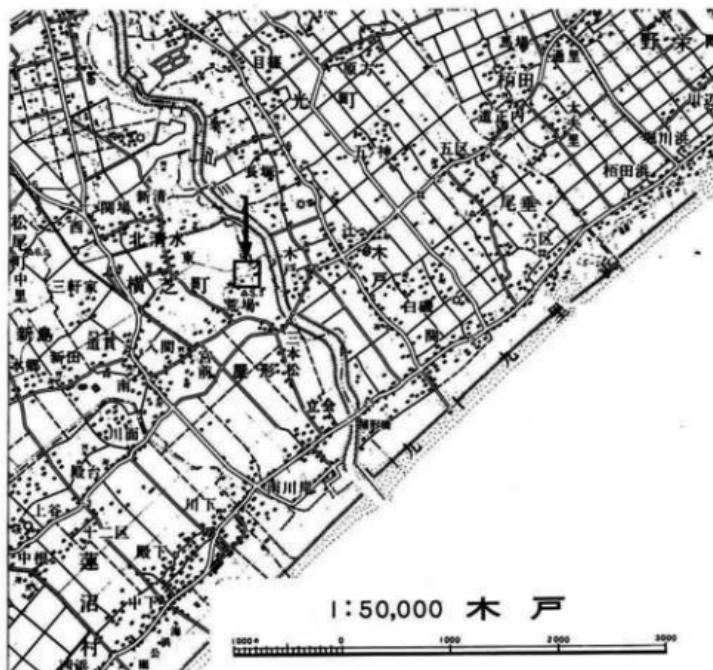


図1 粉豆遺跡の位置

古墳時代以降、低地においても古代の集落が営まれたことを物語っている。

特に、星形地先で確認された粉豆遺跡は、栗山川右岸の標高約3mの砂丘列の先端に占地、砂丘縁辺の削平地や農道に接した崖面からは、国分寺期のものと推定される土師器・須恵器が多量に検出される（図1）。遺跡地の周辺では、別荘地の造成など開発が進行しつつあり、約180haにおよぶ耕地整理事業が計画されている。従って、近い将来、遺跡地も含めて大幅な地形環境の変容を余儀なくされるものと思料される。町教育委員会では、予想される遺跡地の破壊に備えて、当該遺跡の一部を発掘し、平野内における低地遺跡の実態を把握するための確認調査を実施することとした。



参考 I 旧地形と遺跡地 (明治16年陸軍迅速測図)

1 : 粉豆 2 : 押出 3 : 宮脇 4 : 木戸

2. 遺跡の位置と景観

粉豆遺跡は、千葉県の東部に位置する九十九里平野のほぼ中央、横芝町屋形字粉豆1528番地に所在する。遺跡は、国鉄総武本線横芝駅の南東4.8km、現海岸線から約2km内陸の標高約3mの

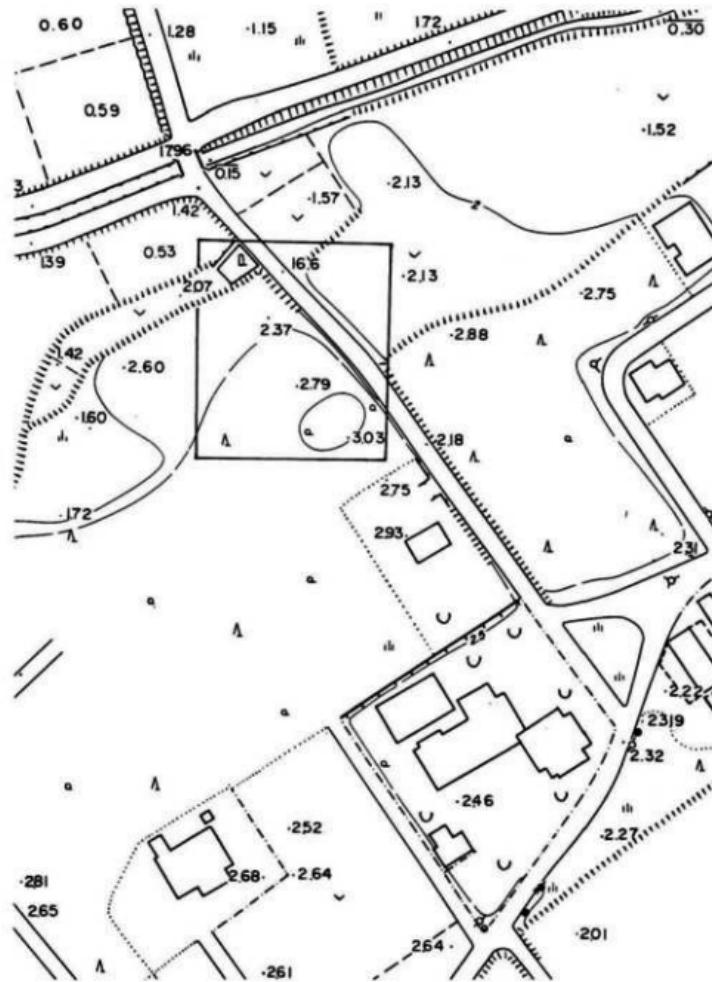


図2 遺跡付近地形図(1:1000)

砂丘列の先端部に占地している。

付近一帯は、九十九里海岸に接し、栗山川（2級河川）の右岸に展開する低湿な田畠混合の純農村地帯である。その地形は、九十九里汀線に向い1/450～1/1300の傾斜で、標高—0.1mから3.9mの平坦地である。地質は第四紀沖積層に属し、土壤は強グライ土壤砂土遷元型および旭続層である。

遺跡の所在する砂丘列は、幅400～600mで約1.5kmほど続き、西南方向にゆるく傾斜している。砂丘列の南側は当時の海岸線であったものと推定され、遺跡地の北方は旧河川による浸蝕面で、現水田面との比高差は約2mを測る（図2）。

列丘列の縁辺は、開墾されて畠・宅地として利用されているが、広範囲にわたって土師器・須恵器の破片が散布している。旧地形を残す山林の部分においては、地表下50～80cmの砂層中に大型の土器片が埋没している。遺物の多くは国分期に属するもので、平安時代初期に形成された海浜集落の一部であるものと推定される。

3. 発掘調査の概要

1) 遺跡の概況

名 称——粉豆遺跡

種 類——土師器の散布地

所在地——千葉県山武郡横芝町屋形字粉豆1528番地他

立 地——栗山川右岸の砂丘上（現汀線から約2km内陸）

現 状——山林・畠・宅地（一部）

2) 調査の概要

目 的——平野内の低地遺跡に関する学術調査

期 間——昭和60年12月1日～8日

面 積——約23m²

主体者——横芝町教育委員会

担当者——伊藤一男（九十九里総合文化研究所・調査研究員）

時 期——平安時代初期（国分期）

性 格——半農半漁の集落遺跡（砂丘上の海浜集落）

遺 構——鐵治工房跡（推定）

遺 物——土師器419点・土師質須恵器79点・須恵器14点・鐵治遺物4点・灰釉陶器3点・

綠釉陶器1点

4. 遺構

1) 調査区

学術調査の対象としたのは山林約500m²で、測量原点（標高3.022m）から北西方向の長軸線上に5m間隔で調査区を設定した（図3）。調査区の規模は、①1m×5m（T1・T2・T3）、②2m×4m（G1）の二種類で約23m²を発掘調査した。

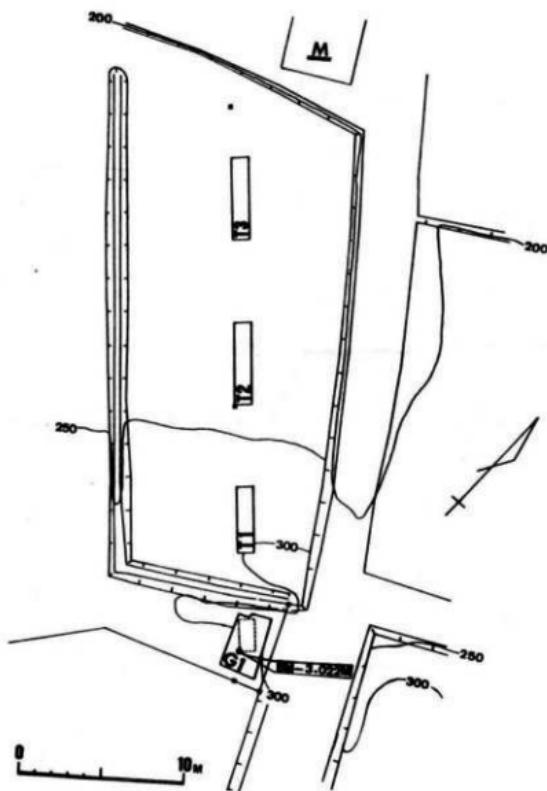


図3 遺跡実測図

2) 土層構成

本砂丘の土層構成は、1層（暗褐色土・表土）、2層（褐色土）、3層（明褐色土）、4層（黒褐色土・埋没腐植土層）、5層（茶褐色土・埋没腐植土層）、6層（黄褐色土・基盤砂層）に分層される（図4）。

特に注目されるのは、地表下50~100cmに位置する埋没腐植土層（4層・5層）で、黒褐色を呈する比較的硬い土層であり、G1・T3いずれも部分的に開墾による擾乱が認められる。多くの遺物は2層下から検出され、地表下50~80cmの4層が比較的濃厚で、大型破片は5層の深度90cmあたりに埋没している。

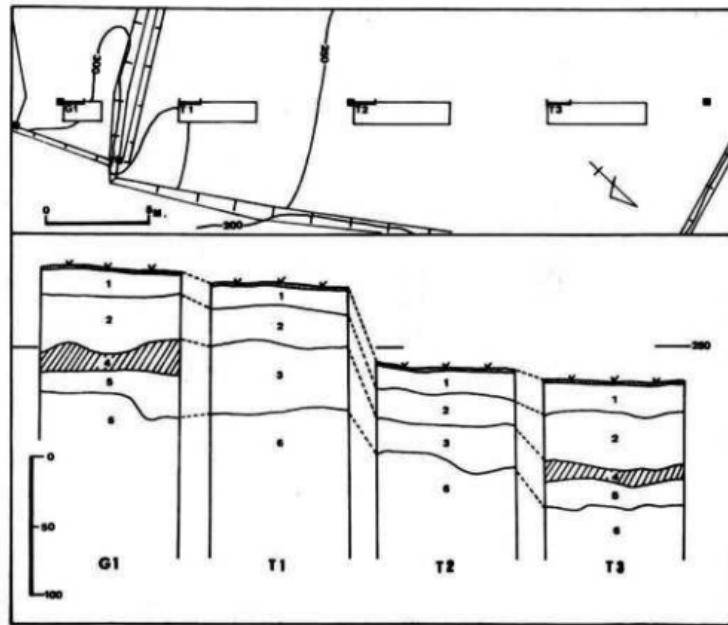


図4 土層堆積状況

1. 暗褐色土（腐植土層）
2. 褐色土
3. 明褐色土
4. 黒褐色土（埋没腐植土層）
5. 茶褐色土（埋没腐植土層）
6. 黄褐色土（基盤砂層）

3) 遺構 鐵冶工房跡（推定） G1区において埋没腐植土層（4層・5層）除去後、鐵冶工房の一部とみられる遺構プランを確認（図5）。すでに5層を調査中、不明確ながらも2.8m×2m範囲の遺構の存在を確認しており、方形プランの南隅から土師質須恵器（甕）の大形破片が一括出土した（図6）。

遺構は、地山である基盤砂層（6層）を約20cmほど掘り込んで床面を形成しており、覆土中からは多量の木炭片とともに鉄滓・金属片（鉄物）が検出された。炉本体は未確認であるが、その

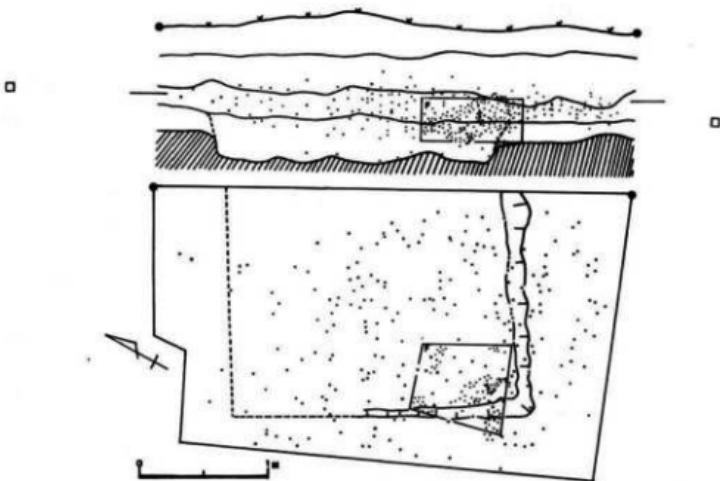


図5 遺物出土状況・セクション (G1)

遺物状況から推して、鐵冶工房跡の一部であるものと思料される。方形プランを呈する本遺構は、住居跡としては規模が小さく、床面内に柱穴が存在しないので、その性格は不明である。今後の本格的調査の成果に期待したい。



図6 遺物出土状況実測図 (G1-F)

5. 遺物

1) 土師器

變形土器 (図7-2) G1区の埋没腐植土層から検出された變形土器の口辺部を大で、復元口径は約17.5cmと推定される。整形は口縁部から頸部にかけてはロクロナデ、内面はナデ、頸部外面には縱方向のヘラケズリが施されている。胎土・焼成ともに良好であり、胎土中に少量の砂粒を含み、器肌は比較的硬く、色調は暗褐色を呈する。口辺部から胴部外面にかけてススの付着が認められる。

環形土器 (図7-3) G1区から検出された丹塗りの環形土器の底部を大で、復元底径は約7.5cmと推定される。整形は内面・外面ともにナデが施され、焼成・胎土ともに良好で色調は明褐色を呈する。

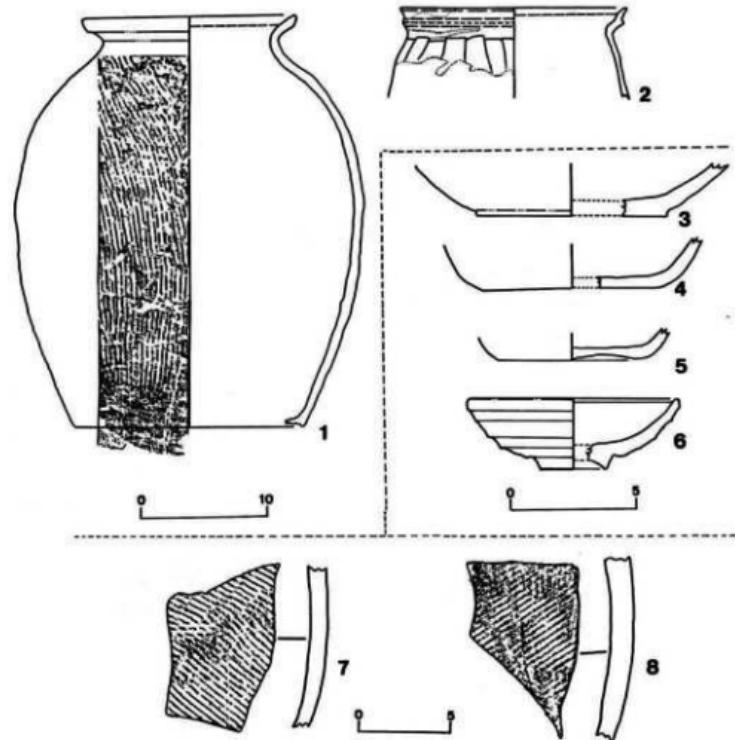


図7 遺物実測図 (G1)

环形土器（図7—4） G 1区から検出された环形土器の底部を大で、復元底径は約7cmと推定される。整形は、外面はヘラミガキ、内面には黒色処理が施され、胎土・焼成とともに良好で、断面の色調は明褐色を呈する。

环形土器（図7—5） G 1区から検出された丹塗りの环形土器の底部を大で、復元底径は約6cmと推定される。整形は、内面はナデ、外面はヘラミガキが施されている。胎土中に少量の砂粒を含み、焼成も良好で、色調は明褐色を呈する。

2) 須恵器

甕形土器（図7—1） G 1区の埋没腐植土層（F）から検出された土師質須恵器の甕で、その遺存度は約 $\frac{1}{2}$ 個体であり、底部を欠くものの復元法量は器高32.5cm、口径16.5cm、胴部最大径26.5cm、底径17.5cmと推定される。器形は、胴部の中位で豊かに膨み、上半部から頸部にゆるやかな曲線を描いて、外反する口辺部へと連なっている。整形は、胴部外面は同心円状の叩き目、下半部には横方向のヘラケズリが施され、口辺部はロクロナデで仕上げられている。胎土・焼成とともに良好で、器肌はよく締まり硬く、色調は明灰褐色を呈する。

甕形土器（図7—7・8） G 1区の遺構覆土中から検出された須恵器甕の胴部破片で、遺物7は長径10cm、厚さ1.2cm、遺物8は長径9cm、厚さ1cmを計る。整形は外面に叩き目が施され、胎土・焼成とともに良好で、色調は青灰色を呈する。

3) 陶 器

縁輪盃（図7—6） G 1区から検出された縁輪盃の $\frac{1}{2}$ 大で、復元法量は器高2.8cm、口径8.2cmを計る。いわゆる東海系（愛知）の陶器の小品で、整形は内面・外面ともにロクロナデが施され、底部の切離しは不明であるが高台（蛇目）は径2.7cm、高さ0.4cmを計る。胎土・焼成とともに良好で、色調は緑灰色を呈する。

4) 鋼冶遺物

鉄滓（Slag・PL 6—13） G 1区の遺構床面から検出された鉄滓は、一般に楕形鉱滓と呼ばれるもので、鋼冶炉の火床に溜った残鉄と非金属性滓の混合物である。成分的には、少量の鉄分と石灰・マグネシア・無水珪酸・アルミナ、その他から成る。

G 1区の遺構覆土中からは、多量の木炭片とともに、鑄物と推定される金属片や鉄滓が検出された。サンプル軸出した鉄滓3点は、比較的小型のもので、内1点には炉壁の砂粒が付着している。炉本体は未発見であるが、遺構の覆土状況からみて、鋼冶工房の一部であるものと推定される。

（本遺物の観察については、流山市在住の穴沢義功氏より多くのご助言を賜ったことを付記する。）

6. 埋没腐植土層の土壤分析

1) 土壤資料の抽出

G1区の地表下50~100cmで確認された埋没腐植土層は、黒褐色を呈する比較的硬い遺物包含層であり、当時の生活面（表土層）であったものと推定される。自然堆積の腐植土層とは認め難く、農耕地として利用された可能性もあるので、昭和60年12月20日、千葉県地力協会の指導を得て当該地の土壤分析を実施した。分析用の土壤資料は、G1区東壁の4点から各500gを抽出した（図8）。

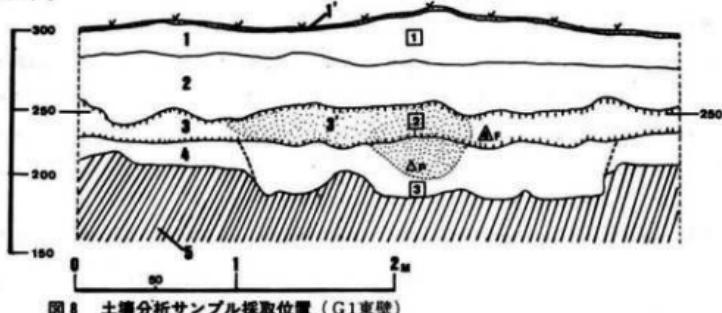


図8 土壤分析サンプル採取位置 (G1東壁)

資料①～1層（現表土・地表下10cm）

資料②～3層（埋没腐植土・地表下70cm）

資料③～4層（遺構覆土・地表下115cm）

資料④～F層（遺物内部・地表下75cm）

2) 各種の分析

酸度測定 分析法：PH測定器使用

判定：①6.4 ②6.4 ③6.5 ④6.5

標準値：沖積砂質土壤 6.0~6.5

EC測定 分析法：EC測定器使用

判定：①0.04 ②0.13 ③0.04 ④0.04 (me/cm)

標準値：沖積砂質土壤 0.10~0.40

塩基測定 分析法：全農型土壤検定器使用

判定：CaO～①160 ②190 ③40 ④50 (mg/100g)

MgO ~ ①36 ②48 ③32 ④38

K₂O ~ ①20 ②8 ③4 ④4

P₂O₅ ~ ①38 ②25 ③2 ④3

標準値: CaO 150~250 MgO 20~45 K₂O 15~20 P₂O₅ 10~30

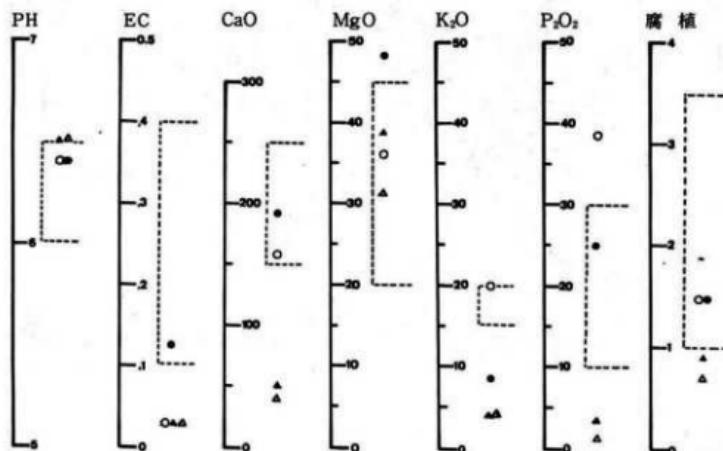
腐植率 分析法: 全農型土壤検定器使用

判定: ①1.5 ②1.5 ③0.7 ④0.9 (%)

標準値: 沖積砂質土壌 1.0~5.0

3) 分析結果の整理

上記の測定値によると、粉豆遺跡のG 1 区におけるPH値は6.4~6.5の微酸性を示し、EC値も資料②の0.13me/cmを除き、ほとんど塩類・重金属の集積は認められない(図9)。



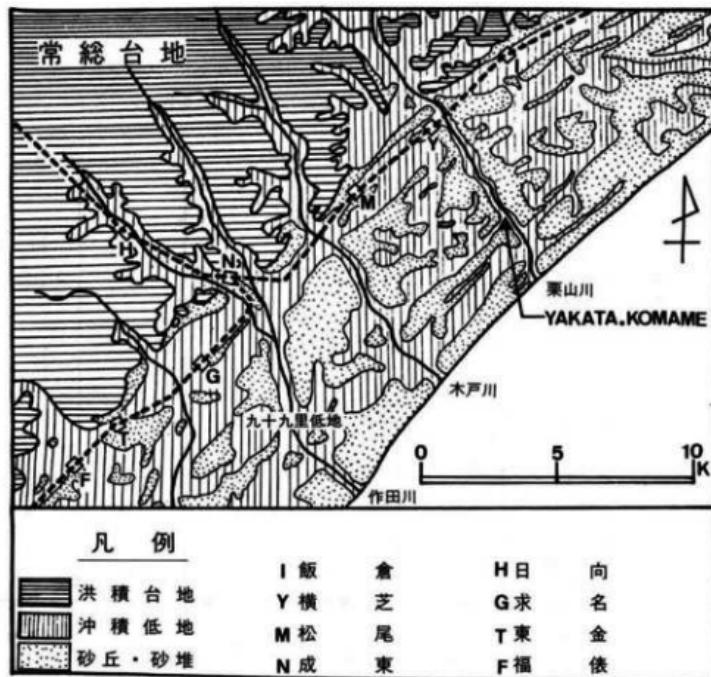
項目 サンプル	PH (H ₂ O)	EC (1 : 5 ms/cm)	CaO (mg/100 g)	MgO (mg/100 g)	K ₂ O (mg/100 g)	P ₂ O ₅ (mg/100 g)	腐植 (%)	M
① G-1	6.4	0.04	160	36	20	38	1.5	○
② G-2	6.4	0.13	190	48	8	25	1.5	●
③ G-3	6.5	0.04	40	32	4	2	0.7	△
△ G-F	6.5	0.04	50	38	4	3	0.9	▲

図9 土壤分析数値表 (分析: 千葉県地力協会)

さらに置換性塩基は、資料①・②のみが標準値の範囲内で、特に②はCaO 190mg/100g・MgO 48mg/100gと非常に高い数値を示している。

埋没腐植土層である資料②は、有効磷酸 (P_2O_5) 25mg/100g、腐植率1.5%で、現表土層(①)とともに標準値内の数値を示している。

以上の分析結果は、G 1区からT 3区にかけて埋没する腐植土層(4層・5層)が自然の堆積層ではなく、明らかに長期間にわたる有機性物質の人工的集積があった可能性を示している。その堆積の状況からみて、当時の地表面であるとともに、農耕的な土地利用も十分に推測される。



参考2 地形区分図

7. 考 察

本遺跡からは、前述したことく平安時代初期の遺構・遺物が発見された。この粉豆の地か約1000年以前から人々の生活の場として利用されていた事を物語っている。以下、発掘調査の成果を簡単にまとめ、分布調査の概要をも紹介しつつ、栗山川下流域の低地遺跡について考察してみたい。

粉豆遺跡は、標高3m程の沖積低地の砂丘上に立地している。現海岸線から約2km内陸の微高地において、国分期に属するとみられる遺構・遺物が発見されたことは、正直なところ予想外のことであった。

約23m²の発掘調査ではあったが、土師器・須恵器・陶器・鉄滓など、約500点におよぶ遺物が出土した。その多くは日常生活用品（汁器）であり、出土の状況からみて、付近一帯は平安時代初期の海浜集落であったものと推定される。また、多量の木炭片とともに、鉄滓・金属片が少なからず検出されるので、当時、鍛冶工房が営まれた跡であるものと理解される。

今回の調査では住居跡は検出されなかったが、鍛冶遺構はそれ単独で存在したのではなく、集落に附隨する遺構と考えられるので、調査区のすぐ近くに住居跡が構築されていた可能性がある。また、本遺跡の立地環境からみて、豎穴住居の形態をとらなかったので、今回、住居跡が発見されなかつとも思料される。ともあれ、低地帯における平安時代初期の遺構・遺物は、栗山川下流域では新発見のものである。

今回の調査が、沖積低地に立地する土師器の散布地の実態を把握するための確認調査であったとはいえ、横芝地方の歴史に新たな事実を書き加えたものと思っている。一方、今回の調査では、新たな課題も残されている。他の同様な低地遺跡、台地上の遺跡との関連と比較、さらに低地の開発と居住地との関係など、当地域での集落の歴史を考えて行く上では、避けてはとおれない重要な問題であろう。

九十九里平野のほぼ中央を貫流する栗山川は、香取地方の山間部を水源として、多古橋川・借当川などを合流しながら太平洋に注いでいる。その流路は約32kmで、上中流域では小支流が常緑台地を樹枝状に開析、奥深い浸蝕谷群は広範囲にわたる渓谷平野を創出している。慶應義塾大学の清水潤三教授によれば、この渓谷内には縄文早期以降、海水が進入して「多古の海」の状態にあり、樹枝状台地の縁辺部には大小数多くの貝塚が形成されていたとされる。やがて、稲作農耕を主体とする弥生文化の円熟を経て、豪族的支配関係を基盤とする古墳時代の展開をみると、渓谷集落の台地上の要所には武社国造期の古墳と遺物散布地が群集している。⁽¹⁾

栗山川下流域は海岸平野を流れるが、九十九里沖積低地の陸化は、縄文中期以後の海退とともに開始される。本来、この海岸平野は隆起作用によって形成され、平野の内部では數列の砂丘とその間に低湿地が存在しており、砂丘の成因は海流によるものと指摘されている。ところで、海岸線（汀線）は、海進・海退・隆起・沈降などなど、様々な地形的変動を受け複雑な地形を呈し

ている。汀線付近には海波と土砂によって浜堤・砂丘が形成され、汀線の移動とともに、海岸線に平行して幾重にも砂丘列が創出される。一方、砂州の発達によって形成されたラグーンが埋積

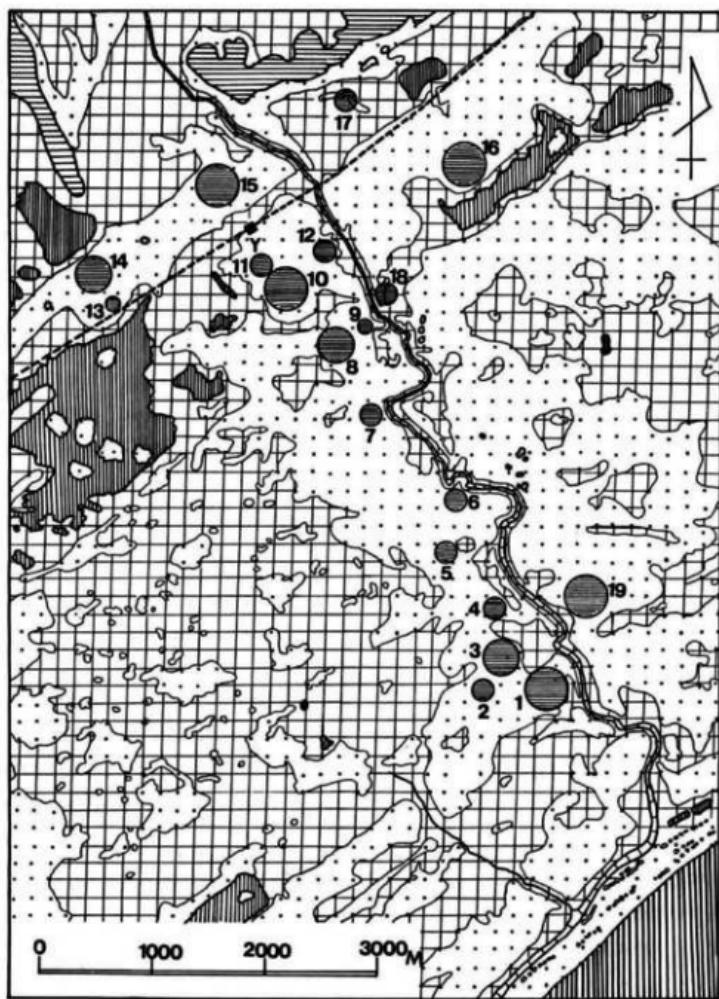


図10 栗山川下流域の低地遺跡

(明治16年陸軍迅速測図による復元地形)

されると、排水不良の湿潤地帯となり、重厚な泥炭層や粘性グライ土層が創出される。

栗山川下流域の場合、両総台地の海蝕崖直下から浜汀まで約10kmの間に5~8列の砂丘が形成され、旧河道は幾重にも蛇行して、広汎な氾濫湿地と河畔砂丘・自然堤防を展開させている。沿岸一帯の砂丘列上には、土師器の散布地など数多くの遺跡が分布している（図10参照）。

栗山川の右岸で確認された土師器の散布地は約15か所で、その占地状況をみると、浜堤上10・砂丘上4・河岸段丘1の内訳である。これらの遺跡群は、古墳時代以降、低地帯の微高地に営まれた集落の跡と推定され、平和（7）・真砂（14）・竜ヶ塚（15）など五領期の遺跡に始まる。さらに、庚申（10）・伊古田（11）など真間期の集落も認められるが、その多くは国分期に属する平安時代初期に営まれた集落である。

遺跡の保存状況をみると、宮脇（5）・宮ノ後（6）・平和（7）が比較的良好で、粉豆遺跡（1）も一部良好である。また、三軒家（2）・庚申（10）・伊古田（11）・赤岩（12）など、多くの遺跡で歴史時代の貝塚が認められる。2・11はすでに貝層が露出しており、10は広範囲に貝塚を伴った大規模な遺跡である。地域的には、平和遺跡（7）を境界線として南北に区分され南部（1~6）は殆んど国分期の遺跡で、対岸には当該期の木戸遺跡（19）が所在する。一方、北部（7~15）は五領期（7・14・15）、真間期（10・11）、国分期（8・9・12・13）の遺跡によって構成され、対岸には五領期の桑郷（16）・芝崎（17）・古屋（18）の遺跡が所在している。これら遺跡の多くは、概して砂丘列の北側斜面に占地しており、砂丘列の中央部から南側斜面では殆んど確認されない。このことは、海浜集落の多くが海側からの強風を避けて砂丘列背後地に営まれ、稲作生産の関係から水辺付近の微高地に居住したことを物語っている。

以上、栗山川下流域における低地遺跡の概要であるが、九十九里平野内の遺跡の分布状態で注目されるのは、その多くが河川に面した砂丘の縁辺部に位置することである。このことは、当時の低地開発の様式を示すものと考えられ、地形的制約や土木工事の技術的问题によって、利水の便に恵まれた河川沿岸に限定されたものと推測される。

のことから想定される水田経営のあり方は、砂丘列間に残存する沼沢の溜水を利用して水稻栽培を営み、さらに悪水を河川に排水する方式が採用されていたものと考えられる。事実、この水源（沼沢）・耕地（水田）・排水路（河川）の利水パターンは、大規模な新田開発が行われる江戸中期まで続いているのである。このような低地開発のあり方が、やがて古代末期以降における集落形成の様態を規定し、九十九里特有の列状に展開する村落景観を創出していったものと思料される。

九十九里平野内における低地遺跡は、繩文中期以降、歴史時代まで約120か所ほど確認されている。これらに科学的な調査のメスが加えられて、初めて九十九里の眞実の歴史が明らかにされる筈であり、「沖積低地に遺跡は好在しない」とする行政的研究者の偏見と最早訛別すべき時がきたと思うのである。本紀要を、そのプロローグとして提出したい。

註

- 1) 清水潤三「千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究」『史学』31の4 (1958)
- 2) 伊藤一男・小高春雄・加瀬盛久『横芝町埋蔵文化財分布地図』横芝町教育委員会(1986)
- 3) 松井健「表層地質と土壤生成との関係について一九十九里海岸平野の例一」『資料科学研究所業報』27

参考文献

- 清水潤三「九十九里沿岸に於ける低地遺跡の研究」『史学』4の27 (1954)
- 古内茂「山武地方に位置する低地遺跡について」『ふさ』3 (1572)
- 西山太郎「九十九里平野の遺跡について」『奈和』16 (1977)
- 神尾明正・森谷ひろみ「東總の古代社会・旭市砂丘列先史原始時代遺跡分布図」『旭市史』第一卷 (1980)
- 伊藤一男「両總栗山川流域の土師式遺跡——九十九里平野の低地遺跡に関する一考察一」『荒久台遺跡』 (1981)
- 小高春雄「九十九里平野の古代史」『房總の郷土史』12 (1984)
- 津田芳男「小林西之前遺跡」茂原市文化財センター (1985)

関連論文

- 伊藤一男「山武郡横芝町粉豆遺跡の発掘調査——東上総における平安期海浜集落の鍛冶構——」『房總の郷土史』14 (1986)



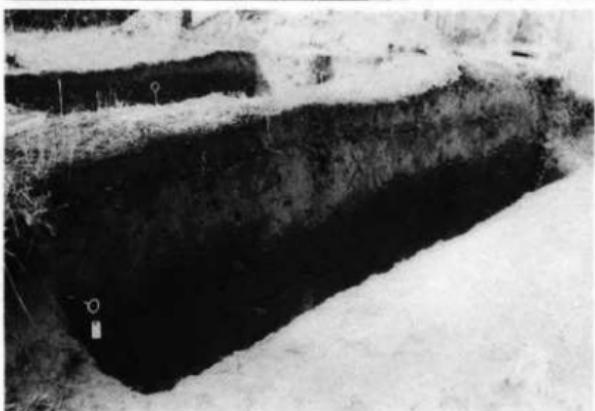
- 1 粉豆遺跡(屋形)
- 2 目篠後遺跡(屋形)
- 3 押出遺跡(北清水)
- 4 宮脇遺跡(北清水)
- 5 木戸遺跡(光町)
- 6 長塚遺跡(光町)



遺跡遠景



遺跡全景



G-1 東壁



トレンチ全景



T 1



T 2



T 3



G 1 遺物出土



遺物出土狀況(G 1)



遺構(G 1)



01



02



03



04



05



06



07

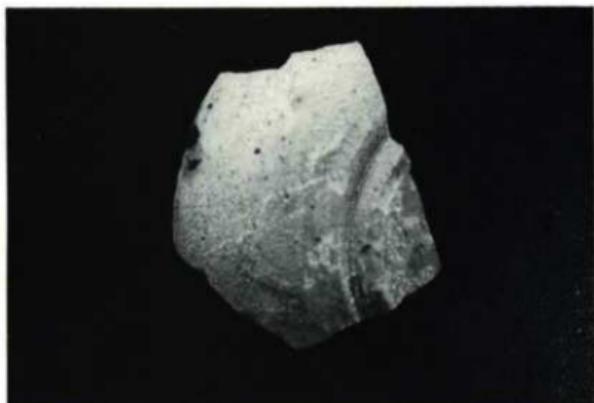


08



09

01 土師質須恵器 02~09 土師器 10 須恵器



11 綠釉陶器（盃）



12 灰釉陶器（盃）



13 楝形鉛錠

横芝町文化財研究紀要 II

発行日：昭和61年4月10日

著者：伊藤一男

発行所：横芝町教育委員会

印刷所：佐原印刷株式会社
